

## 社会・経済を比較する(その一六)

盛田 常夫

### 「改革アロガンズ」の敗北

― 国民投票結果が意味するもの

3月9日に実施されたハンガリーの国民投票は連立政府にとって、予想もしない大敗となった。実に330万を超える票が政府の政策に「ノー」を突きつけた。投票率こそ50%を僅かに超えたのだが、実にそのうちの8割が「不信任票」を投じた。絶対得票率で4割である。政府与党のシヨックは大きい。野党の基礎票はせいぜい230万票だから、100万票ほど社会党の支持層から流れた勘定になる。明らかに、この投票は僅かな金額の国民負担の是非を問うたものではなく、政府の信任投票だったのだ。

SZDSZのホルン・ガーボルはコーカ党首との立ち話で「国民がジュルチャーニを追放した」と語ったことがEuronewsでキャッチされ、社会党幹部が色めき立った。ピント外れも甚だしい。国民投票はジュルチャーニだけでなく、SZDSZをも追放したのだ。なぜなら、強引な医療改革を主導し、これを飲まなければ連立を解消すると社会党を恫喝し続けたのはSZDSZに他ならないからだ。

社会党とSZDSZはこれが総選挙でなくて良かったと胸をなで下ろしていることだろう。もしこれが総選挙だったら、社会党の議席は三分の一以下に激減し、SZDSZは国会の議席のすべてを失っただろう。

アロガンズ」だった。こうした政治姿勢が社会党の支持者までに嫌われ、その結果、社会党の支持率は歴史的な低水準に落ち込んでしまった。まさに、ジュルチャーニの傲慢とそれを見逃した社会党幹部会が墓穴を掘ったのだ。

#### 複数保険制度イデオロギー

この傲慢に最後の一滴を加えたのが、医療保険制度に民間保険会社を入れるSZDSZの複数保険制度の強引な導入だった。ハンガリーにこの制度を受け容れる条件はない。にもかかわらず、SZDSZはこれを金科玉条のごとくに唱え、これなしでは医療改革はないと猛烈なキャンペーンを張った。まさに、複数保険制度はSZDSZの新自由主義イデオロギーになってしまった。この新自由主義はアメリカのネオコン（新保守主義）と同じものだ。

彼らに共通しているのは、「賢人による支配」である。絶対啓蒙主義を受け継ぐアロガンズである。ネオコンが軍事力と市場に絶対的な信頼を置くが、それが世界に大きな被害をもたらしたことは明白である。ハンガリーでも、「複数保険制度を認めない者は馬鹿だ」とばかりに、これ以外に改革の道はないと社会党を押し切ったのだ。これがアロガンズでなくて何だろう。

さらにもう一つ共通しているのは、歴史認識や社会的条件無視の持論の普遍化である。イラク戦争を始めた時に、アメリカのネオコンが日本の戦時占領経験を活かすことができる」と真剣に考えていたように、歴史や社会的条件の差異に無関心なのだ。歴史音痴だとも言える。それはヴェトナム戦争の時も同じだった。アメリカの任意医療保険制度をハンガリーにもってきて

マッチ・ポンプ

国民投票における野党の勝利は「右派の勝利」とはいえない。旧「左翼」のかんりの部分が政府の強引な「改革政策」に反対しているからである。そもそも、「ライト」とか「レフト」という政治概念は、完全に時代遅れになっている。にもかかわらず、政治学者や一般国民がこの概念を使っているのはどうしてだろうか。現在の政治政党は設立理念とは無関係に活動している。区別があるとすれば、政権に就いているか否かだけである。政権にある政党は否が応でも現実問題の解決に取り組まざるを得ず、野党はその政府案を批判していれば良い。だから、「左翼」の社会党が資本主義政策を推進し、「右派」のFIDESZが社会主義政策を擁護するという奇妙な逆転現象が起きている。

それにしても、どうして「右」とか「左」とかという古い概念を日常的に使用しているのだろうか。旧社会主義国の国民がこれを使う場合、そこには一つの合理的な意味が込められている。彼らの言う「左翼」とは、「旧共産党（青年組織）を継承する人々で、権力の甘い汁を吸っている権力エリート」という意味合いなのだ。事実、社会党の幹部の多くは、旧共産党（社会主義労働者党）・青年組織の活動家だった人々だ。ジュルチャーニ自身、旧共産党青年同盟の幹部であり、カールダーが共産党政治局員アプロ・アンタル（ジュルチャーニ夫人の祖父）に与えた大邸宅で生活している。彼らは旧体制でも新体制でも、権力の頂点に立っている。FIDESZを応援する人々は、こうした権力エリートの反対物として、「右派・右翼」という概念を使用しているのだ。これにたいして、政治学者の使う「右」「左」の概念はきわめて不明瞭で、ルーティ

機能する訳がない。

まさに、ネオコン＝新自由主義に共通するのは、傲慢そのものなのだ。国民はジュルチャーニとSZDSZの傲慢さに痺れを切らした。今時の国民投票の結果を、オルバンは「ハンガリーの勝利」と讃え、これにたいしてパウエル・タマーシユはまたまた大仰にも「ハンガリーの敗北」と切り返したが、そのような大層なものではなく、敗北したのは「改革アロガンズ」なのだ。

#### 改革の畏

社会党党首ジュルチャーニとSZDSZ党首コーカはともにビジネス経験をバックに、予算機関の抜本的改革推進の先頭に立った。それは高く評価して良い。彼らの行動力や判断力がなければ、ハンガリーのぬるま湯的な体質は永遠に続くだろう。他方、彼らの改革が社会保険制度に向かった時に、大きな落とし穴があった。国营企業の民営化と同じような感覚で事を進めようとした。医療保険制度を民営化すれば医療問題が解決すると考えるのは、きわめて単細胞的思考だ。世界は今、社会保険制度に改革に悩んでいる。しかし、それに絶対的な処方箋はない。ほとんど国は社会保険制度の枠組みを維持しながら、改革を行っている。資本を入れれば解決するというのは、ネオリベのイデオロギー。社会を支える根幹に関わる制度の改革には、幅広いコンセンサスと支持が必要だ。ところが、ジュルチャーニ＝コーカのペアはその忍耐力を持たなかった。社会保険制度改革では、ビジネス経験が逆に裏目に出た。政治的な失敗である。

もう一つの落とし穴は、ハンガリーの改革能力であ

んのに使っているだけ。一種の知的怠慢と言える。

オーストリア在住のポール・レンドヴァイ（亡命ハンガリー人歴史家）は、テレビインタヴューの中で、「EU程度程度の負担すら拒否するハンガリー人はどうかしている」と述べていたが、レンドヴァイは今時の国民投票の意味を分かっている。

国家予算の赤字がこれほどまでに累積した発端は2002年の総選挙で、社会党とSZDSZが公務員給与の50%引き上げなど、ポピュリスト政策でFIDESZから政権を奪還したことに始まる。オルバンの傲慢にたいする批判票も追い風になった。指導力のないメツジエシ首相もとてSZDSZは政府内で発言力を高めていき、この連立政府4年間で国家財政赤字は2倍に膨れあがったが、政府はその事実を隠していた。2006年の総選挙で今度はFIDESZが猛烈なポピュリスト政策で政権奪還を狙ったが、さすがに国民は人気取り政策に疑心暗鬼で、もう一度社会党とSZDSZに政権を任せる選択をとった。この時点までは国民は社会党とSZDSZの連立政府に寛容だった。ところが、総選挙直後に、ジュルチャーニのウースド演説（「社会党は嘘を尽きつばなしだった」と、それに続く選挙公約と正反対の財政引き締め政策が始まったのだ）。

これ以後の一連の騒動の中で、ジュルチャーニや社会党幹部会は国民の不満や不信感を過小評価した。いざれ事が収まり、改革の成果が出てれば、風向きが変わると。しかし、今回の投票結果はその甘い予想を粉々にしてしまった。連立政府は財政赤字の全責任を負わなければならない。だから、緊縮政策を示す前に、謝罪と理解を求める姿勢が必要だった。しかし、ジュルチャーニの態度はそれとはまったく正反対の「改革」。政府のどの改革も十分な準備なしで、見切り発車された。ハンガリーの行政機関の組織力や効率性が低いことは周知の事実。ハンガリーの行政改革では、末端の改革まで細部にわたって実現の状況を把握し、適時的に対策を講じるチームや責任者など存在しない。だから、いつも政府の政策決定とその実行には、天と地ほどの乖離が生まれる。ハンガリーでは政府の改革実行が大きな混乱なしに進んだ試みがない。まして、複雑な改革を準備なしで行えば、末端の現場でカオスが起きるのは当然のことだ。

300Ftの診療費や1000Ftの入院治療費を導入した時に、どこでも大混乱が起きた。今でも病院の診療を受けようと思ったら、まず診療費を支払う窓口に行列することから始めなければならない。それが終わったら、各診療科のドアの前で再び行列が待っている。何のことはない、行列する手間が増えただけなのだ。300Ftの支払いの有無や金額の大きさ、その合理性の問題ではなく、国民には無駄な負担を強いたという感覚しか残らないのだ。

ハンガリーで複雑な制度を構築しても機能しないことは明白。まして、制度構築の社会的条件もないものを導入しようとするれば、ただ混乱が広がるだけだ。そういう問題を無視して、自らのイデオロギーを押しつけようとしたSZDSZが、国会議席消滅の危機を迎えているのは当然のことかもしれない。ハンガリーに必要とされているのは、アメリカ型の民間医療保険制度ではなく、分権化された単純で統一的で、透明かつ公正な社会医療保険制度への改革なのだ。

国民投票で、医療保険制度改革は振り出しに戻った。